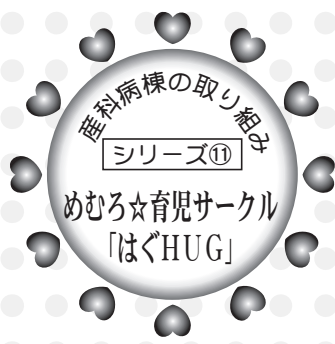




公立芽室病院 第64号

だより

ホームページアドレス
http://memuro.com
又は芽室町ホームページのトップページから
アクセスできます。



めむろ☆育児サークル「はぐHUG」の活動が1年経ちます。

毎回、「聞いて！私のお産」「赤ちゃんの気持ちを知ろう」「おっぱいがいっぱい」などいろいろなテーマで、スタッフ、準スタッフが中心になり、グループに分かれてお話をします。時には外部から講師を招いてお話を聞いたりします。参加人数は10~25人位と子ども達、いつも大盛況で楽しいおしゃべりの声が響いています。参加した人はその中で、元気やヒントをもらい笑顔で帰っていきます。

「家族皆で子育て」というテーマのある日ははぐHUGの様子です。「夫は手伝ってくれるんだけどいつものペースが崩れる、どうしたらいいんだろう」「我が家は夫の帰りが遅いので手伝ってもらえない。みんなどうやっているの」「親と同居だけど」などなど。更には「ハミガキをつけて子どもの歯磨きをする？誰がする？」など。テーマから広がっているいろいろな話題もあり話はずきません。時間になりそれぞれのグループからの報告があった後は、そろそろ眠くなった子を抱いて帰るお母さん、持参したお昼を食べるお母さんや子ども達などそれぞれ。午後は自由におしゃべりをします。病院から参加する助産師も「この湿疹は病院にかかったほうがいいのか」「子どもが便秘なんだよね」などちょっとした相談にのります。お母さん達はいっぱいお話をし、子ども達はボランティアの人達(スタッフとは別に4人の方が託児ボランティアに来て下さっています)にいっぱい遊んでもらって満足して終わります。

サークルの中心になるお母さん達のこの1年の感想の一部を紹介します。

Aさん「今まで関わることのなかった方々と触れ合い色々な考えを知りました。妊婦さんや小さい子

を見て、3人目が欲しくなりました」
Bさん「人とのつながりの大切さ、安心、心強さを感じました。家で考え向き合うのも大切だけどパートナーと人と話せるのも大切!! 楽しそうな参加者の顔を見るのも嬉しいです」

Cさん「ベビベビでは出産に不安を抱く妊婦さんに、はぐHUGでは育児に不安を抱くママ達と自由に語り合いながら、それぞれの不安に対するヒントが得られる貴重な場です。自分も育児に対する姿勢が正されているように思います」

Dさん「転勤族で周りに知り合いが少ないので、こういう場は本当に助かるし楽しいです。同じような環境にある人達の不安が、少しでも減る場になるようお手伝いできたらと思います」

Eさん「まだスタッフになり間がないけれど、はぐHUGに関わって嬉しいです。沢山のお話が聞けて、手助けしているつもりが私も皆さんに助けていただいているなあと感じます。一応3人の子育てをしているので初めてのお母さんの力になりたいと思います」

Fさん「はぐHUGに関わり私の育児も変わったように思います。息子と同じ年のお友達も増え私の息抜きもでき大変うれしく思います」

子育てに正解はないけれど、愛情を注ぐお母さんとそれを求める赤ちゃんの関係、その関係をスムーズに育てていけるのがおっぱい(母乳育児)と言われます。子育ては楽しいけれど、ちょっと大変、でもやっぱり幸せと思うお母さん。そんなお母さん達が集まり、お互いに支え合いたい、その輪を広げたいと願い活動しているのがめむろ☆育児サークル「はぐHUG」です。

愛情いっぱいのお母さんとお母さんの関係は、赤ちゃんとお母さんを守りともに育つお父さん、そして、おじいちゃん、おばあちゃん、更に、その周りの地域の人々など、多くの人に支えられています。母乳育児から始まる母子の絆が家族の絆へ、そして社会へ、世界の輪へ、人と人が温かにつながり、広がることを、はぐHUGに関わりながら、助産師として日々妊娠中のお母さんやお産するお母さん、赤ちゃんと一緒にのお母さんのお手伝いをしながら、出会いに感謝しつつ願っています。

十勝町村立診療施設協議会主催

地域医療公開シンポジウム

今回で4回目となる十勝町村立診療施設協議会主催の「地域医療公開シンポジウム」が3月8日芽室町駅前プラザ2階セミナーホールで開催された。今回は道内の町村で芽生えつつある住民による地域医療を守る活動が一段と発展していくことを願い、全国で先進的に住民として地域医療を守る活動を展開されている千葉県東金市の「NPO法人地域医療を育てる会」の理事長藤本晴枝さんをお招きし基調講演をいただきました。会の活動を学び、住民による活動について活発に議論されました。

基調講演 もうお客様ではられない! 地域医療に参加する住民とは?



NPO法人
地域医療を育てる会
理事長 藤本晴枝氏

地域医療を育てる会は、その名のとおりに地域医療を育てることを目的としています。ちょうど四つ葉のように4枚の葉っぱが「医療・住民・行政・福祉」の4つの分野がひとつになってほしいという希望があります。活動内容は、住民に地域医療実情を情報発信しています。

医療の実情については当時、幼稚園に勤めていた私にとって知らないことが沢山あり、他にも知らない人が大勢いるに違いないと思い、自分が知らないこと、分からなかったことを取材しそれを発信しています。医療や行政はどんなことに困っているのか、問題解決のために住民は何ができるのか、こうしたことを情報誌やホームページ、ブログで公開しています。

その中でひとつの出来事を紹介いたします。この出来事はマスコミが新聞報道し、後に地域医療を育てる会がどのように情報発信したのかを紹介します。「千葉県東金市の男性が自宅で心肺停止状態になり、のべ14回搬送受け入れを断られて、通報から約1時間後に搬送されたが死亡した。病院が受け入れを断ったのは医師が診察中などの理由だった」という内容です。この記事で、「医師が診察中」という言葉の中には、いったいどの様な体制で医師が勤めていたのだろうか疑問に思い、病院に取材した結果、分かったことがありました。ひとつの病院は、「当時、救急当番は内科医1名で、ウイルス感染症の疑いなど2名の緊急患者対応をしていた。本来心肺停止患者には最低でも3人の医師と、対応に2~3時間は必要である」という。次の病院では「外科医1名で、手術後の患者の処置や、大腸がん

患者の来院、更に救急車3台を受け入れていたため対応が出来なかった」。こういった内容を記事では「診察中」という軽い表現となっています。マスコミは必ずしも医療の問題を公平に取材しているとは限りません。どちらかというと患者側の視点に立った取材となることがあります。さらにこの出来事は平成19年8月にありましたが、記事となったのは翌年の2月でした。このため必ずしも現場を取材して報道しているとも限りません。医療機関はマスコミに対抗する弁明の場を持っていません。仮に弁明したとしても「言い訳」「医師同士のくばいあい」ととられます。結果、医療現場の方々は、理不尽な情報発信をされても、それに対して説明をすることをあきらめるケースが多いのです。つまり住民が知ろうとしない限り、医療の実情は伝わりません。地域医療を育てる会ではこのような医療の現状を情報誌で知らせています。

患者を受け入れる医療機関が、限られた施設やスタッフの中で最善を尽くしても不幸な結末で終わることが少なくないため、「なぜ十分な受け入れ態勢でないのに患者を引き受けたのか、無責任ではないか」と医療機関を攻めるケースもあります。近年、医療訴訟が増えている中で、医療機関側は、訴えられるくらいなら重篤な患者さんは、態勢が整ったところで受け入れたほうがよいと考えてしまいます。

東金市でも医師不足が深刻な問題となり、患者は医師が少ないので不安になる。しかし、医師が少ない地域では、そこで働く医師たちにも大変な負担が掛かっていることも事実です。そのため医師の負担を軽くするために3つの提案をしています。近くの診療所をかりつけ医にする。夜間のコンビニ受診をせず日中に受診する。自分自身の健康管理に注意するなどの情報を伝えています。現場で奮闘している医師や看護師の負担をできるだけ軽減すること、それがいますぐ私たちに出来ることだと思います。いまいちど皆様にも自分自身で出来ることは何だろうと考えていただきたいと思います。

自分が変われば地域が変わる。そして地域が変われば医療も変わります。もうお客様ではられません。